

教員のための効果的な体験活動のすすめ方

1. はじめに
2. 新しい学習指導要領で
取り上げられた「体験」
3. 体験学習法について
4. 特別活動の学校行事で実施する
「遠足・集団宿泊的行事」
5. 準備の流れ
6. プログラムの作り方
7. 吉備でできる活動一覧
8. プログラムの進め方
9. 評価



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立吉備青少年自然の家

1. はじめに

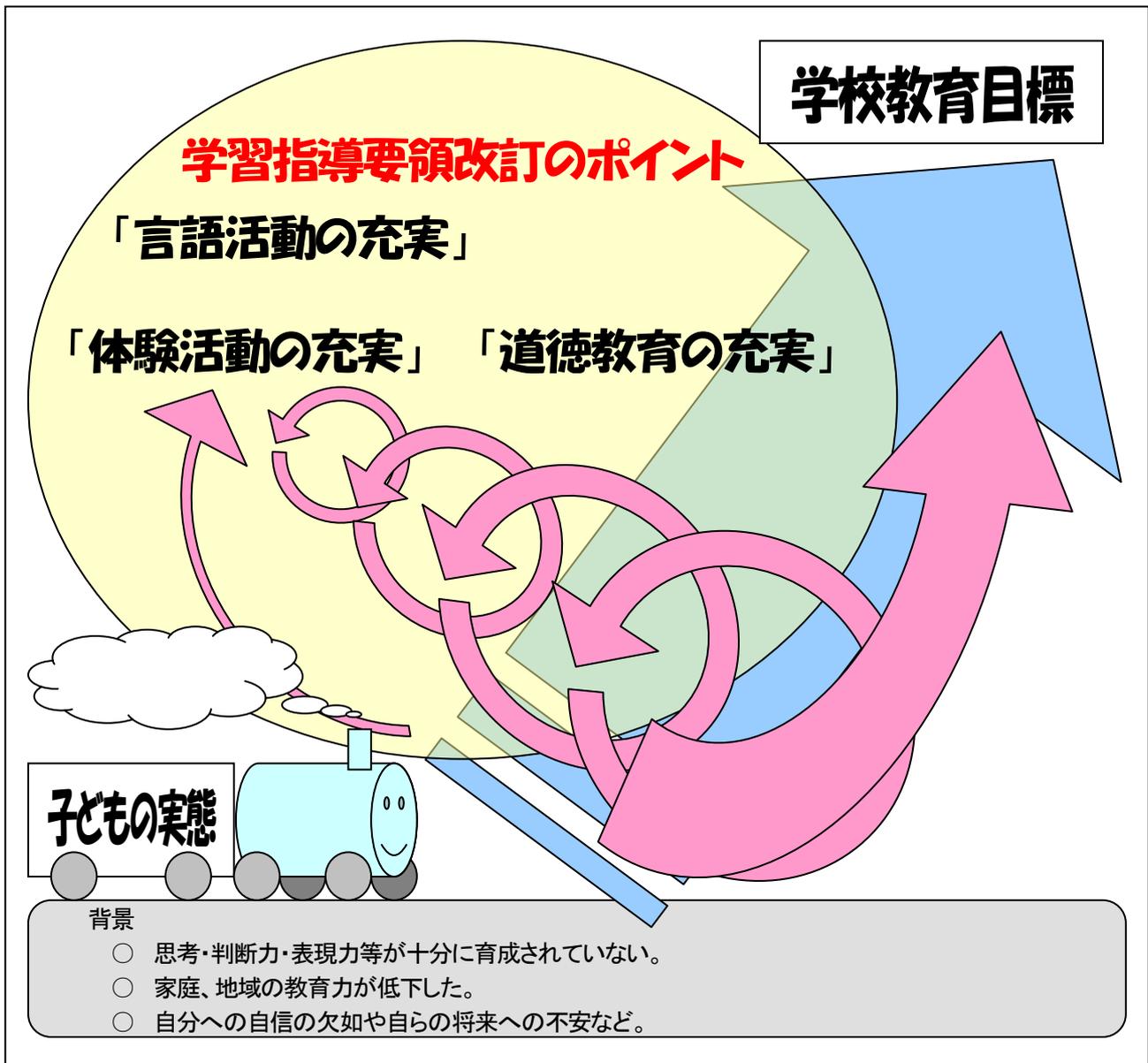
学習指導要領が改訂されました。主な改善事項の中に「体験活動の充実」があります。各小学校においても国立吉備青少年自然の家を利用するにあたって、学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、「体験活動の充実」の具体的な計画の一つとしてご利用を考えられていることと思います。

その際、本紙を参考にさせていただくことで、今後の活動が有意義な研修になることを願っております。

2. 新しい学習指導要領で取り上げられた「体験」

今回の「学習指導要領改訂の基本的な考え方」や「教育内容に関する主な改善事項」において、「体験」に関わる内容が多数含まれています。そこで、別紙1（P. 14～15）においては「学習指導要領改訂の基本的な考え方」と「体験」との関連箇所を、別紙2（P. 16～19）においては「教育内容に関する主な改善事項」と「体験」との関連箇所を抜粋しました。ご確認くださいと思います。

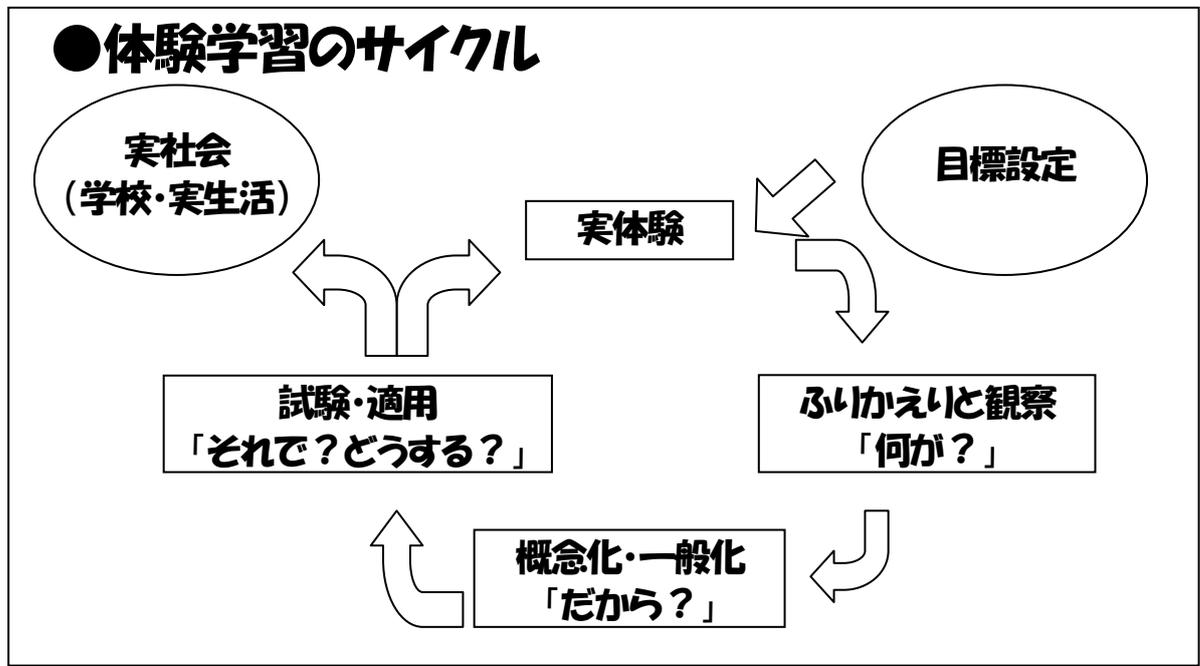
さて、「体験活動の充実」は特別活動や総合的な学習の時間などにおいて充実を図られる内容です。しかしながら、今回の改訂の基本的考え方にある「思考力・判断力・表現力等の育成」や「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」などは、各教科等における密接な連携を図りながら、計画的、発展的に学校の教育活動全体で取り組む必要があります。したがって、当施設をご利用の際にも、学校の教育活動全体の中でどのような位置づけなのか意識して計画されることをお願いしたいと思います。



3. 体験学習法について

「体験活動は活動して終わりでは意味がない。体験したことを、自己と対話しながら、文章で表現し、伝え合う中で他者と体験を共有し広い認識につながることを重視する必要がある。」と、学習指導要領改訂の基本的な考え方（豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実）で示しています。

そこで、活動しただけで終わりにしないためにも、体験を学びにつなげていく体験学習法について触れておきたいと思います。



上記の体験学習のサイクルはディビット・コルブの提唱した4段階の過程で起こる学びは最も効果的であるという理論を土台としています。それぞれの段階で、①実際の体験、②ふりかえりを含む観察、③(抽象的な)概念化、④積極的な実験(適用)にまとめられ、学習の段階を成しています。それでは、一つひとつの段階を細かく見ていきます。まず、「ふりかえり」という言葉は、上の図の「ふりかえりと観察」から「試験・適用」までの流れを指す抽象表現でもあるのですが、このサイクルではその一部として使用しています。

何が？(事実を思い出そう):ふりかえりと観察

今の体験で何が起きていたのか、何が発言されていたのか、誰が何をしていたのか、事実を導き出す段階です。その場で起きたことが重要なこと、学びの種になるようなことが起きていたとしても、その事実を認識しなくては何も起こりません。事実の再認識は学びの糸口となるふりかえりの重要なステップです。

だから？(どう思った・どう感じた・どう考えた?):概念化・一般化=意味づけ

前段階の事実認識に関しての意味づけです。そこにいる人たち(グループ)によって、意味づけられ、感じたこと考えたことはその人たち独自のものになります。いわゆる抽象概念の形成ということもできます。ここで、学ぶ側にはこれは自分に起こったことであるという学びの所有化を促すことになります。

それで？どうする?:試験・適用=アクションプランを立てる

前の段階までで事実を認識し、自分たちにとってそれがどのような意味を持つのかを認識した。それだけで終わってしまい、次に何も変えようとしなかったら学びを生かすことができません。もし事実が必ずしも肯定的な結果ではなかったとき、この「それで？どうする？」ということに触れなければ、後悔や過ぎ去ったことについて未消化のまま終わってしまうかもしれません。その体験をもとに、次はどうするのかのアクションプラン(行動計画)を立てることが、学ぶことになります。

【補足】

毎回体験をふりかえる必要はありません。不用意にふりかえりの機会を設けすぎると学ぶ側にとっては、ふりかえりの押し売りと感じられることがあります。ただ、ここは重要とあらかじめ想定したポイントや、体験によって個人やグループに何か起きたときや、変化があるときは、体験をふりかえるべきです。学びのチャンスを逃さないためにぜひふりかえりをして下さい。

また、体験から学ぶということはトライアル&エラーの繰り返しとも言えます。学びのチャンスは一回で終わりではなく、また巡ってきます。したがって、可能であれば子どもがひっかかっていることについては、次のチャンスを提供する必要があります。その次のチャンスに、「体験学習」のサイクルにそって体験をふりかえり、子ども自らの学びを促して下さい。

「グループのちからを生かす」 プロジェクトアドベンチャー・ジャパンより



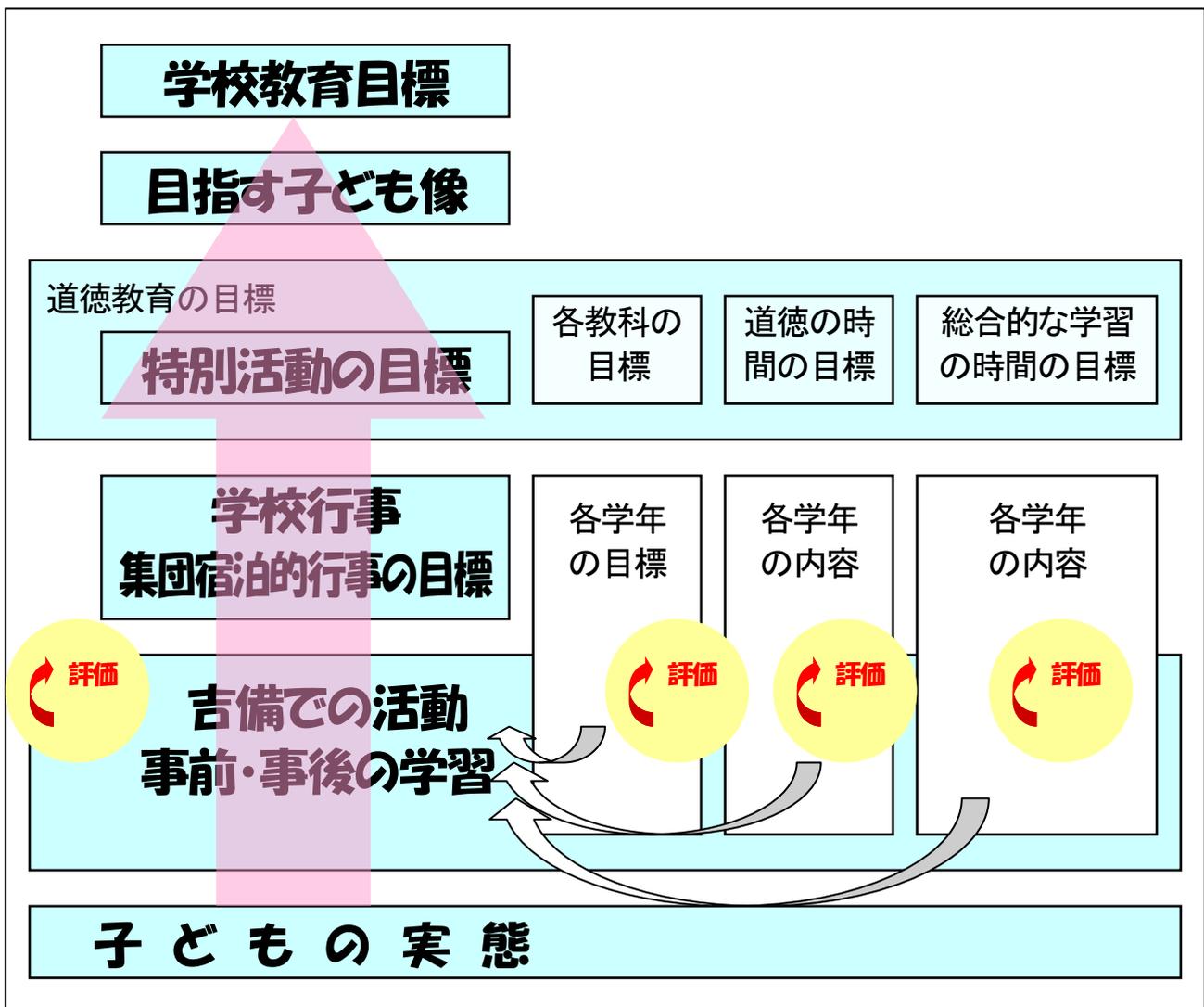
4. 特別活動の学校行事で実施する「遠足・集団宿泊的行事」

学校行事の目標

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

遠足・集団宿泊的行事のねらいと内容

自然の中で集団宿泊活動などの平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、人間関係などの集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。



長期宿泊体験活動を実施する場合、特別活動はもとより「総合的な学習の時間」や「各教科」等を、吉備での活動の中に取り込むことがあります。その場合、その場その時の指導にとどまっていり系統性に欠けて、次の体験活動や各教科等の学習に結びつかないことがないよう、「学んだ内容が次のどの教育活動につながっていくのか」、「この時間で学ぶことは以前学習したことのどこと系統性を持っているのか」など、教員は絶えず意識しながら、計画・実施していく必要があります。

3. 準備の流れ

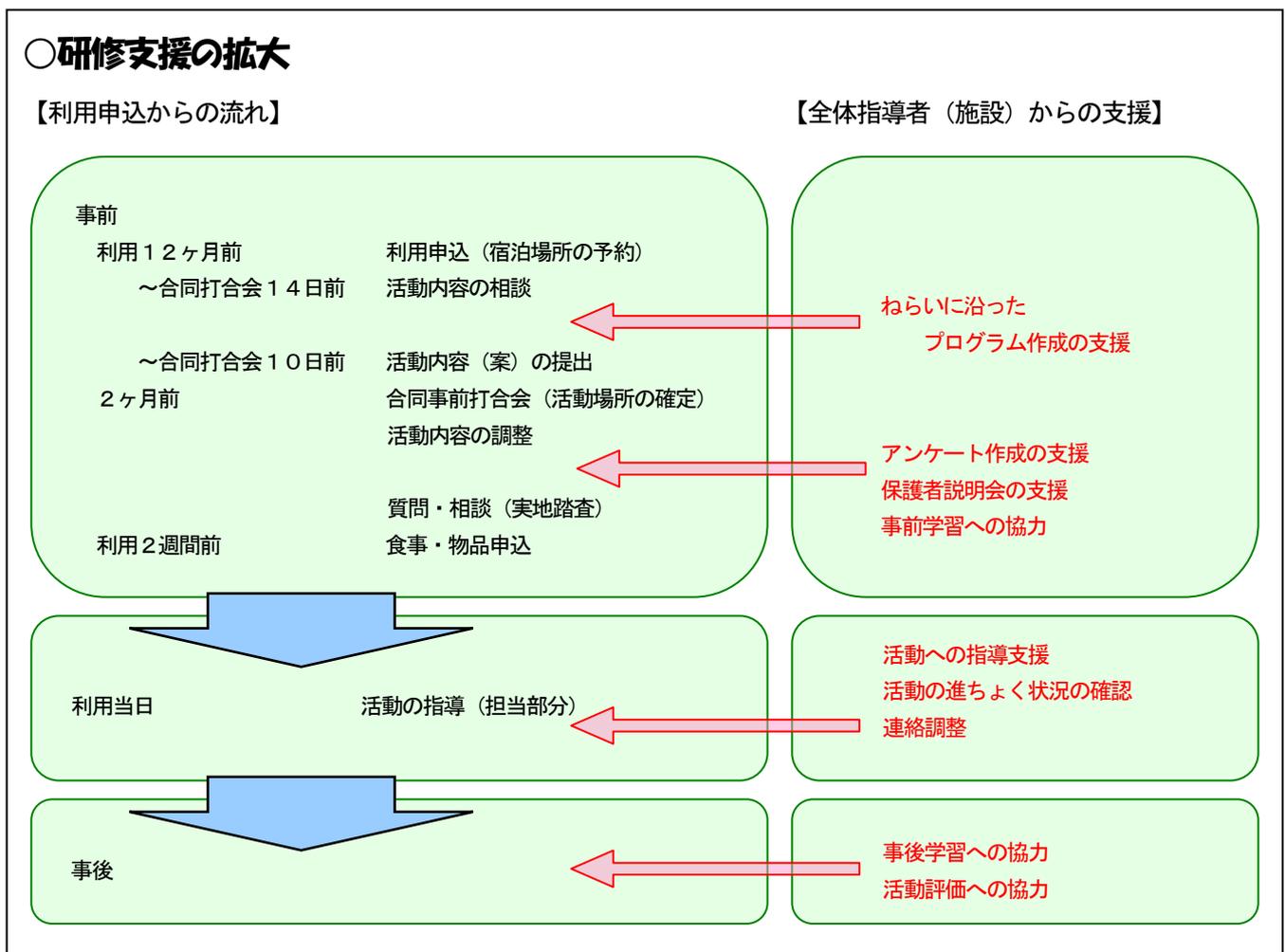
引率経験の有無によっては、どのような流れで準備を進めてよいのか分からないと思います。そこで、別紙3（P.19）「役割分担の確認表」をご覧ください、全体像を踏まえて、事前の準備を進めていって欲しいと思います。

国立吉備青少年自然の家では、「施設の情報提供（実施できる活動、宿泊先等）」、「学校のねらいに沿ったプログラム（案）の作成・提案」、「プログラム・全体計画の作成への助言」等をいたします。ご希望の方は、活動計画を提出される前にお気軽にお問い合わせ下さい。

また、長期宿泊体験等で「全体指導者」の依頼を希望される場合はご連絡下さい。

※ 全体指導者とは

文部科学省は教員の負担を軽減し、教育効果の高い集団宿泊活動を円滑に実施するために、全国の青少年教育施設等で、「自然体験活動指導者養成研修」を実施し、体験活動の指導や、教員等の指導補助として青少年の健康、安全等、生活に関わる指導を行う指導者を養成しています。



4. プログラムの作り方

(1) プログラムとは

ねらいを達成するために、始めから終わりまでの流れを組み立てたものです。

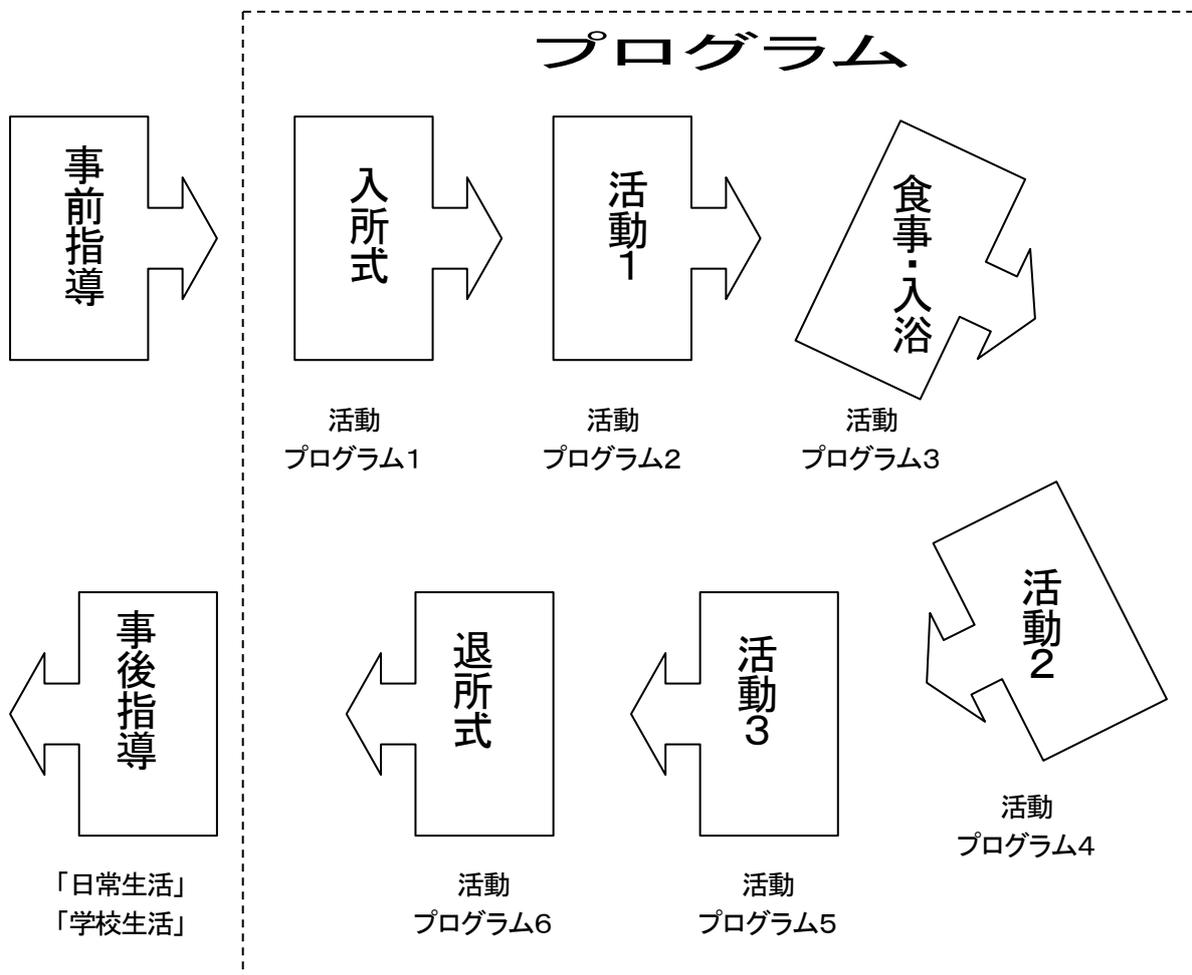
(2) 活動プログラムとは

プログラムを構成する一つ一つの活動のことを指します。

(3) 自然の家での生活を考えると・・・

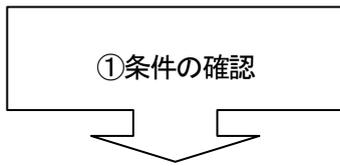
自然の家に到着した時から、出発する時まで、自然の家で行う活動プログラムは、例えば、「オリエンテーリング」や「野外炊事」、「キャンプファイヤー」などだけでなく、「入所式」や「退所式」も一つととらえることができます。

そして、自然の家で行うすべての活動は、『活動プログラム』としてとらえることができ、その全体の組み立てであるプログラムは何のためにやるのか「ねらい」に即していなければなりません。



(4) プログラムの流れを考えるには…

ねらいを明確にしたプログラムの立案を！



対象（人数，男女比，クラス数，班構成）
時期（季節，日数，入所時間，退所時間）
予算（教材費，講師謝金）



体験活動への様々な思いや期待があると思います。しかし，限られた時間の中でより有効な活動を行うためには，最も期待すること（「体験させたいこと」や「学ばせたいこと」等）に絞り込む必要があります。



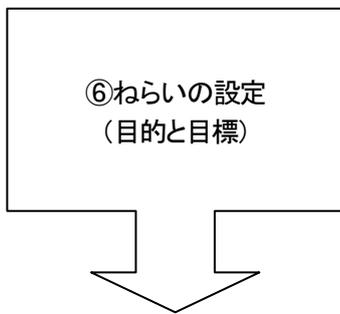
あなたが，その思いや期待を抱かれたのは子どもを見ていて感じられた社会的な背景や子どもの状況があったからではないでしょうか？
あなたの持つ問題意識を整理しましょう。



あなたの立てる活動プログラムはあなたの独りよがりにならないようにするために，今一度客観的に対象の子ども達の特徴、意識、保護者の意識を整理してください。

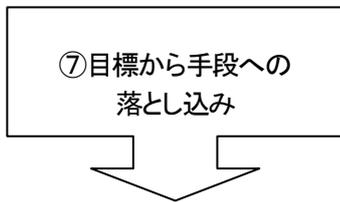


どんなに優れたプログラムでも指導者がいなければ実行できません。施設の持つ環境や活動プログラム，備品、実施される指導者の力・経験、外部講師の確保等，指導を行うための状況を確認してください。



さて，いよいよ具体的な目的を設定していきます。目的とは背景で考える問題意識を何とかしたいということです。「…が問題だから…を育てる」「…を図る」となります。

目的がまだまだ大まかであったり，抽象的であったりすると思います。この限られた時間の中で全て解決することはできないと思います。そこで，ここで達成したい具体的な目標を設定します。



目標としたものが手段選定の基準になります。プログラム立案の際，目標達成するためにはどのような指導法による場や機会が必要ですか。例えば、「コミュニケーション」が課題なら「自分の考えを仲間に伝えなければならないような活動」とか…。



活動プログラム集を参考にしながら具体的なプログラムの立案に入ります。

- * 活動計画を提出される前に相談を受けます。「学校のねらいに沿ったプログラム（案）の作成・提案」，「プログラム・全体計画の作成への助言」をご希望の方は，お気軽にお問い合わせ下さい。
- * また，その際には別紙4（P. 21）の「プログラム作成（聞き取りシート）」を使って，子どもの現状や課題，先生の思いを聞かせていただきながらプログラムを作成していきます。

(5) ねらいに見合った活動の組み合わせ

- ・「導入・展開・終末まとめ」，または，「起承転結」の流れをつくります。
- ・ねらいに向けて活動内容の展開をイメージしながら活動を組み合わせせていきます。
(ねらいを念頭に積み重ねていく感じで)

(6) 生活時間・自由時間も活動プログラムの1つ

・生活時間

食事・入浴も活動プログラムと捉えて考えましょう。参加者間のコミュニケーションの場と捉え、ゆっくりできる時間が確保できるようにすることをお勧めします。

・自由時間

参加者が主体的に活動できる時間として捉えて、まとまった空き時間を取ってみることも有効です。

・休憩時間

活動の集中を高めるために、十分かつ間延びしない程度に。15分～20分程度が目安です。

(7) 柔軟な対応を念頭に

- ・活動プログラムは参加者の状況に応じて柔軟に対応していくものです。
- ・活動プログラムが予定通り進むことにより、ねらいが達成されていくことが重要です。
- ・そのための時間変更や活動の延長，変更，追加をあらかじめ考慮しましょう。
(活動プログラムの特性ごとに複数の活動準備が必要です)

* 実施計画を作成する際には、「プログラム企画時のチェックリスト」を参考に、企画・立案を進めてください。別紙5 (P. 22)



5. 吉備でできる活動一覧

国立吉備青少年自然の家で実施できる活動プログラムを特性ごとに分類しました。

○自然の家でできる活動一覧

	活動内容	自然に親しむ活動	人間関係等集団を育む活動	心を育む活動	環境教育に関する活動	自然のものを使って創作する活動	その地域の理解を深める	当所のスタッフの指導	資料の有無	経費
登山・ハイキング・フィールド活動										
ハイキング	チャレンジ・ウォーク	○	○	◎					作成中	
	湖一周コース	◎	○	○					○	
	山下り冒険コース	◎	○	○					○	
	鳴滝コース	◎	○	○					○	
	暗闇探検	◎	○	○					○	
オリエンテーリング	スコアオリエンテーリング(鬼ヶ島コース)	○	◎	◎					○	
	〃(桃太郎冒険コース)	○	◎	◎					○	
	ポイントオリエンテーリング(Nコース)	○	◎	◎					○	
	〃(Dコース)	○	◎	◎					○	
	〃(Wコース)	○	◎	◎					○	
	〃(Hコース)	○	◎	◎					○	
	〃(8コース)	○	◎	◎					○	
	フォトオリエンテーリング	○	◎	◎					○	
ウォークラリー	館内オリエンテーリング		◎	◎					○	
	国少ウォークラリー	○	◎	◎					○	
	ウォークラリー牧場コース	○	◎	◎			○		○	
	吉備高原都市ウォークラリー	○	◎	◎			○		○	
	フォトラリー	○	◎	◎					○	
食育										
野外炊事	野外炊事		◎	○					○	食材、薪等
	手作りうどん		◎				○		○	食材
	吉備団子作り		◎				◎		○	食材
	ツイストケーキ		◎						○	食材、薪
	餅つき		◎				○		○	食材
	カートドッグ		◎						○	食材
スポーツ										
グラウンド	フライングディスクゴルフ	○	◎	○					○	
	マウンテンバイク(赤鬼コース)	○	◎	◎				導入指導有り	○	
	〃(青鬼コース)	○	◎	◎				導入指導有り	○	
	〃(鬼ヶ島コース)	○	◎	◎			○	導入指導有り	○	
	グラウンドゴルフ	○	◎	○					○	
湖	カッター活動	○	◎	◎				指導有り	○	5300円/1回
	いかだ遊び	◎	◎	◎				導入指導有り	○	
ニュースポーツ	クライミングウォール			◎				導入指導有り	○	
	インディアカ		◎	◎					○	
	キンボール		◎	◎				導入指導可	○	
	ユニホック		◎	◎					○	
	ソフトバレー		◎	◎					○	
	ベタンク		◎	◎					○	
	スポーツ雪合戦	○	◎	◎						
レクリエーション	キャンプファイヤー		◎	◎					○	薪、トーチ等
	キャンドルサービス		◎	◎					○	ローソク台
	森のスタジアム	◎		◎					○	
	乗り物遊び		◎						○	
	芝そり	◎							○	
	カブラ		◎	◎					○	
	イニシアティブ・ゲーム(パイプライン)		◎	◎					作成中	
	〃(キーパンチ)		◎	◎					作成中	
	〃(マシュマロリバー)		◎	◎					作成中	
	〃(島渡り)		◎	◎					作成中	
	〃(交通渋滞)		◎	◎					作成中	
〃(人間知恵の輪)		◎	◎					作成中		
〃(時限爆弾)		◎	◎					作成中		

	活動内容	自然に親しむ活動	人間関係等集団を育む活動	心を育む活動	環境教育に関する活動	自然のものを使って創作する活動	その地域の理解を深める	当所のスタッフの指導	資料の有無	経費
クラフト										
木材	焼き板	○	○	○		◎			○	教材代
	コースター	○				◎			○	教材代
	ペンダント作り	○				◎			○	教材代
	ぶちごま	○				◎			○	教材代
	組み木作り	○				◎			○	教材代
	はしブロック	○				◎			○	教材代
竹	竹とんぼ	○				◎			○	教材代
	竹コップ・はし	○				◎			○	教材代
	竹スプーン	○				◎			○	教材代
	竹笛	○				◎			○	教材代
	水鉄砲	○				◎			○	教材代
	紙鉄砲	○				◎			○	教材代
	竹筒水筒	○				◎			○	教材代
	水中メガネ	○			○	◎			○	教材代
花	ネイチャーパウチ	○				◎			○	教材代
	花炭作り	○				◎			○	
その他	紙作り								○	
	キャンドル作り								○	教材代
	ペットボトルランタン								○	
	ブラホビー								○	教材代
	紙ブーメラン								○	教材代
	フェナキスティスコープ								○	
自然・観察										
星	天体観察	◎				◎		指導有り	○	2000円/1回
	天体観察(独自)	◎				◎			○	
虫	虫レース	◎				○			○	
	虫のしかけづくり	◎				◎			○	
	土掘り	◎				◎			○	
	生き物スタンプラリー	◎				◎			○	
その他	川遊び	◎	○	○	◎				○	
	魚釣り	◎			◎				○	
	魚釣りビンゴ	◎	○	○	◎				○	
	山の探検・山遊び	◎			◎				○	
	ツリーイング	◎		◎	○				作成中	2000円/1名
歴史・文化										
制作	七宝焼	○				◎		指導有り	○	教材代
	わら細工	○				◎		指導有り	○	3300円/指導者
レクリエーション	伝承遊び	○	○				◎	○		
その他	火起こし体験	◎	○	◎					○	教材代
その他										
その他	折り紙ヒコーキ	○							○	
	奉仕活動			○					○	
	写生	◎							○	

○活動表の見方について

活動プログラムの特性について

一覧の◎, ○は, それぞれの活動の特性として『◎…高い効果が期待できる』, 『○…効果が期待できる』を表しています。しかしながら, どのような指導をするかで, その効果は異なります。

指導について

- ① 指導は団体の引率者や団体指導者が行うことを原則としています。
- ② 『導入指導』と記載されている活動は, 当施設職員が活動前の説明や指導方法について指導を実施しています。それ以外にも, 希望に応じて, 当施設職員が説明や指導を行いますので, ご相談ください。ただし, 団体の人数の規模やその日の利用状況によってはできない場合もあります。

6. プログラムの進め方

(1) プログラム実施中に心がける視点

* 「プログラム実施中のチェックリスト」については別紙6（P. 23）をご利用下さい。

(2) 「ふりかえり」の10の視点

* 実施した活動を単に「体験した」で終わらせないために、活動からの気づきや学びを整理し、次への活動や日常生活へつなぐパイプをつくっていきましょう。

活動中のグループをよく観察すること

ふりかえりをする前にグループがどのように課題に向かっていきますか？ メンバー同士でどのような関わりをしていますか？ 設定した目標はどうでしたか？

ふりかえりのときの雰囲気づくり

活動と同様、楽しさは大事です。時には腰を据えてじっくり考えることも必要ですが、毎回だと辛くなります。メンバーが安心して意思表示できる雰囲気ですか？ まだまだアイスブレイキングが必要な雰囲気ですか？ ふりかえりの時間も考える必要があります。

ふりかえりのトピックスと方法を決める

ふりかえりのトピックスを何に絞りますか？ グループにとってタイムリーなものはなんですか？ 活動の目的と関連したものでしょうか？ 次への行動へのステップになりうるものでしょうか？ ふりかえりの方法はどんな方法を使いますか？

沈黙をおそれない

沈黙が耐えられなくて、指導者が話をしてしまうとメンバーは話すきっかけを失い、話を聞くだけで考えることもストップしてしまいます。せっかくの学びの機会をなくしてしまうので、ゆっくり見守ることも大切です。メンバーが考えるのが嫌になって苦しくなる前に、見極めて次に移ることも大切です。

目力(めちから)の威力に注意

ふりかえりの最中に指導者と目が合うと“何か発言しないと！”という気持ちになってしまうことがあります。目のやり場に困るのですが、何か言ってね！という思いを持って見てしまうと、それは伝わってしまいます。ご注意ください。

日常に転化する回路をひくこと

ふりかえりで出てきた事柄を日常の場面とつなげていくチャンスが、きっとあります。チャンスを逃さないように“これは！”と思ったときには、日常生活とつなげていくことをお勧めします。

ふりかえりをするのに適した場所

活動場所や季節によっても違いがありますが、グループが集中できるように配慮します。グループの状況や環境に合わせていかないと深まりが薄くなります。

ふりかえりをしすぎないこと

ふりかえりは毎回必ず必要なわけではありません。必要と思ったときにすることをお覚えておいてください。もしかしたら、ウォーミングアップで何か起きるかもしれません。そのときにはふりかえりをする必要があります。時には体験そのものが語る場合もあります。逆に、しすぎること逆効果にならないようご注意ください。タイミングはもちろん、時間が長すぎるのも考えものです。

話題の“ふれ”に注意

話題が違う方向へ行きつくと気づいたら、今の話題は何であったのか？ 次の話題に行ったのか？ 違うのか？ をグループメンバーにも分かるように伝えて元の話題に戻しましょう。そのままにするとふりかえり自体が何だったの？ という状態になり、焦点がぼけてしまいます。

様々な思いに対する心の準備が必要

思ってもみなかったようなことを開示する場合があります。その開示された内容がグループに関係し、メンバーの力で解決できるものなのか、それとも個人的なものか。活動中やグループが解散するまでに解決できるものなのか、などを判断する必要があるでしょう。

「グループのちからを生かす」 プロジェクトアドベンチャー・ジャパンより

7. 評価

(1) 児童・生徒の学習評価

集団宿泊活動は、学校の教育活動として行われるので、当然のことながら、単に「楽しかった」「たくさんいろんなことが体験できた」「事故なく計画通りに実施できた」というだけで終わってしまわないようにしなければなりません。つまり、各教科等の目標は実現できたかをしっかりと評価し、今後の教育活動につなげていくことが不可欠です。

評価の仕方については、客観的なデータを収集できるように事前・事後のアンケートを実施することをお勧めします。

国立青少年教育振興機構では、体験活動による「生きる力」の変容を測定・分析できるように、アンケート用紙・分析ソフトを作成しています。送付を希望される方は、メールまたはFAXで「名前」「所属」「連絡先（住所、電話番号）」を添えてお問い合わせください。

【問い合わせ先】

総務企画部 調査研究・広報課 調査情報係

Tel. 03-6407-7744 Fax. 03-6407-7689 E-mail : honbu-jyouth@niye.go.jp

また、独自に評価項目を作成される学校は、国立吉備青少年自然の家までご相談下さい。

(2) プログラムの評価

集団宿泊活動の「事業評価チェックリスト」については別紙7（P. 24）をご利用下さい。



(1) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

(中央教育審議会(答申)H20. 1. 17より)

今回の学習指導要領改訂で、現在の子どもたちの課題への対応の視点から6つのポイントが上げられています。

- ①「生きる力」という理念の共有
- ②基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ③思考力・判断力・表現力等の育成
- ④確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑤学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ⑥豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

上記の中で「体験」と関連のある箇所がありますので、まず、始めに確認しておきたいと思います。

「基礎的・基本的な知識・技能の習得」の中で取り上げられている「体験」

基礎的・基本的な知識・技能の一層の習得・理解を図る具体的な方策として、発達や学年の段階に応じた指導の重視が上げられており、個人差あるものの、一般的に、小学校低学年から中学年までは、体験的な理解や具体物を活用した試行や理解、反復学習などの繰り返し学習といった工夫による「読み・書き・計算」の能力の育成を重視し、中学年から高学年にかけて以降は、体験と理論の往復による概念や方法の獲得や討論・観察・実験による思考や理解を重視するといった指導の工夫が有効であると考えられている。

「思考力・判断力・表現力等の育成」の中で取り上げられている「体験」

現在の各教科の内容、PISA調査の読解力や数学的リテラシー、科学的リテラシーの評価の枠組みなどを参考にしつつ、言語に関する専門家のなどの知見も得て検討した結果、知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、以下のような学習活動が重要であると考えた。このような活動を各教科において行うことが、思考力・判断力・表現力等の育成にとって不可欠である。

- ①体験から感じ取ったことを表現する。
- ②事実を正確に理解し伝達する。
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- ④情報を分析・評価し、論述する。
- ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

これらの学習活動の基盤となるものは、数式などを含む広い意味での言語であり、その中心となるのは国語である。しかし、だからといってすべてが国語科の役割というものではない。それぞれに例示した具体の学習活動から分かるとおり、理科の観察・実験レポートや社会見学レポートの作成や推敲、発表・討論などすべての教科で取り込まれるものであり、そのことによって子どもたちの言語に関する能力は高められ、思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られる。

このため、学習指導要領上、各教科の教育内容として、これらの記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要がある。

また、思考力・判断力・表現力等の基盤となる言語の能力の育成に当たっても、発達の段階に応じた指導が重要である。幼児期から小・中・高等学校へと発達の段階が上がるにつれて、具体と抽象、感覚と論理、事実と意見、基礎と応用、習得と活用と探求など、認識や実践ができるものが変化してくる。

このため、小・中・高等学校を通じ、国語科のみならず各教科等において、記録、要約、説明、論述といった言語活動を発達の段階に応じて行うことが重要である。

「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」の中で取り上げられている「体験」

学校教育における子どもたちの豊かな心や健やかな体の育成について、家庭や地域の教育力の低下を踏まえた対応が十分ではなかった。そこで、この問題について次の観点を取り上げている。

第一は、自分に自信がもてず、将来や人間関係に不安を感じているといった子どもたちの現状を踏まえると、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信をもたせる必要がある。

そのためにも、国語をはじめとする言語の能力が重要である。特に、国語は、コミュニケーションや感性・

情緒の基盤である。自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわゆるキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である。

また、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流、自然の中で集団宿泊活動や職場体験活動、奉仕体験活動などの体験活動は、他者、社会、自然・環境との直接的なかかわりという点できわめて重要である。体験活動の実施については、家庭や地域の果たす役割が大きく、学校がすべてを提供することはできないが、家庭や地域の教育力の低下を踏まえ、きっかけづくりとしての体験活動を充実する必要がある。体験活動は活動ただけで終わりでは意味がない。体験したことを、自己と対話しながら、文章で表現し、伝え合う中で他者と体験を共有し広い認識につながることを重視する必要がある。

自分に自信をもたせることは、決して自分への過信や自分勝手を許容するものではない。現実から逃避したり、今の自分さえよければ良いといった「閉ざした個」ではなく、自己と対話を重ね自分自身を深めつつ、他者、社会、自然・環境と共に生きているという実感や達成感が自信の源となる。

第二は、第一とも関連するが、道徳教育の充実・改善である。

子どもたちに、基本的な生活習慣を確立させるとともに、社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識を、発達段階に応じた指導や体験を通じて、確実に身に付けさせることが重要である。その際、人間としての尊厳、自他の生命の尊重や倫理観などの道徳性を養い、それを基盤として、民主主義社会における法やルール of 意義やそれらを遵守することの意味を理解し、主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てることが大切である。

(2) 教育内容に関する主な改善事項

(中央教育審議会(答申)H20. 1. 17より)

以上のような改訂の基本的な考え方等のもと、各教科・科目等の内容の改善が必要として、7つの事項が上げられている。

- ①言語活動の充実
- ②理数教育の充実
- ③伝統文化に関する教育の充実
- ④道徳教育の充実
- ⑤体験活動の充実
- ⑥小学校段階における外国語活動
- ⑦社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項

上記の中で関連のある箇所がありますので、同様に確認しておきたいと思います。

「言語活動の充実」との関連

各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。

それぞれの教科等で具体的にどのような言語活動に取り組むかは各教科・科目等の内容で示しているが、国語をはじめとする言語は、知的活動(論理や思考)だけでなく、「学習指導要領改訂の基本的な考え方(豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実)」の第一で示したとおり、コミュニケーションや感性・情緒の基礎でもある。このため、国語科において、これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考え方を尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。

各教科等においては、国語科で培った能力を基本に、コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割の観点から、例えば、

- ・ 体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する(音楽、図画工作、美術、体育等)
- ・ 体験活動をふりかえり、そこから学んだことを記述する(生活、特別活動等)
- ・ 体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う(家庭、技術・家庭、特別活動、総合的な学習の時間等)
- ・ 討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団として意見をまとめたりする(道徳、特別活動等)

などを重視する必要がある。

「道徳教育の充実」との関連

小・中学校においては、道徳教育のかなめとして道徳の時間を設け、特別活動をはじめとした各教科等における道徳教育との密接な関連を図りながら、計画的、発展的に道徳的価値観や人間としての生き方について自覚を深め、道徳的実践力を育成することとされている。

しかしながら、今日、社会規範自体が大きく揺らぐといった社会の大きな変化や家庭や地域の教育力の低下、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流の場や自然体験等の体験活動の減少などを背景として、生命尊重の心や自尊感情が乏しいこと、基本的な生活習慣の確立が不十分、規範意識の低下、人間関係を築く力や集団活動を通じた社会性の育成が不十分などといった指摘がなされている。

また、小・中学校の道徳の時間については、指導が形式化している、学年の段階が上がるにつれて子どもたちの受け止めがよくないとの指摘がなされており、何よりも実効性が上がるよう改善を行うことが重要である。

これらの点を踏まえ、道徳教育の充実に努める必要がある。

このような観点から、道徳教育については、まず子どもの実態を踏まえ、幼稚園・小・中・高等学校の学校段階や小学校の低・中・高学年のそれぞれの段階ごとに取り組むべき重点を明確にし、より効果的な指導が行われるようにする必要がある。その際、

- ・ 幼稚園においては規範意識の芽生えを育てること
- ・ 小学校においては生きる上で基盤となる道徳的価値観の形成を図る指導を徹底するとともに自己の生き方について指導を充実すること
- ・ 中学校においては思春期の特性を考慮し、社会とのかかわりを踏まえ、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実すること
- ・ 高等学校においては社会の一員として自己の生き方を探求するなど人間としての在り方生き方について自觉を一層深める指導を充実すること

にそれぞれ配慮する必要がある。

とりわけ、基本的な生活習慣や人としてしてはいけないことなど社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識、自他の生命の尊重、自分への信頼感や自信などの自尊感情や他者への思いやりなどの道徳性を養うとともに、それらを基盤として、法やルールの意義やそれらを遵守することなどの意味を理解し、主体的に判断し、適切に行動できる人間性を育てることが大切である。

次に、学習指導要領改訂の基本的な考え方(豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実)の第一で示したとおり、子どもたちの発達段階に応じて、親や教師以外の地域の大人や子どもたちの交流、自然の中での集団宿泊活動や職場体験活動、奉仕体験活動は、他者、社会、自然・環境との直接的なかわりの中で自らをふりかえるといった点できわめて重要であり、道徳性の育成にも大いに資するものである。このため、次の「体験活動の充実」で示すとおり、特別活動や総合的な学習の時間などにおいて、これらの体験活動を推進することが必要である。

「体験活動の充実」との関連

子どもたちは、他者、社会、自然・環境の中での体験活動を通して、自分と向き合い、他者に共感することや社会の一員であることを実感することにより、思いやりの心や規範意識がはぐくまれる。また、自然の偉大さや美しさに出会ったり、文化・芸術に触れたり、広く物事への関心を高め、問題を発見したり、困難に挑戦し、他者との信頼関係を築いて共に物事を進めたりする喜びや充実感を体得することは、社会性や豊かな人間性、基礎的な体力や心身の健康、論的思考力の基礎を形成するものである。

このように、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流、集団宿泊活動や職場体験活動、奉仕体験活動、自然体験活動、文化芸術体験活動といった体験活動は、他者、社会、自然・環境との直接的なかわりという点できわめて重要である。これらの体験活動の充実にあたっては家庭や地域の果たす役割が大きいことを前提としつつも、核家族化や都市化の進行といった社会の変化やそれを背景とした家庭や地域の教育力の低下等を踏まえ、学校教育における体験活動の機会を確保し、充実することが求められている。

このため、現在、特別活動や総合的な学習の時間などにおいて行われている様々な体験活動の一層の充実を図ることが必要である。その際、体験活動をその場限りの活動で終わらせることなく、事前に体験活動を行うねらいや意義を子どもに十分に理解させ、活動についてあらかじめ調べたり、準備したりすることなどにより、意欲をもって活動できるようにするとともに、事後に感じたり気付いたりしたことを自己と対話しながらふりかえり、文章でまとめたり、伝え合ったりすることなどにより他者との体験を共有し、広い認識につなげる必要がある。これらの活動は、国語をはじめとする言語の能力をはぐくむことにもつながるものである。

また、体験活動についても、子どもたちの発達段階に応じた充実が必要である。子どもたちの発達の段階として、個人差はあるものの一般的に見られる主の特徴については、例えば、

- ・ 小学校においては、学年が上がるにつれて、自分のことも距離をもってとらえられるようになることから、自分と対象とのかかわりが新たな意味を持つ
- ・ 中学校になると、未熟ながらも大人に近い心身の力をもつようになり、大人の社会とかかわる中で、大人もそれぞれ自分の世界をもちつつ、社会で責任を果たしていることへの気付きへと広がっていく
- ・ 高校生になると、思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになり、自分は大人の社会でどのように生きるかという課題に会う

といったことが挙げられる。

このような発達の段階のほか、親や教師以外の地域の大人などとの交流の場や自然体験の減少といった子どもたちを取り巻く状況の変化を踏まえれば、学校教育においては、

- ・ 自己が明確になり、自覚されるようになる小学校の時期においては、自然の偉大さや美しさに出会ったり、身近な学校の仲間とのかかわりを深めたりする自然の中での集団宿泊活動
- ・ 大人が社会で責任を果たしていることに気付き、進路を自分の問題として考え始める中学校の時期においては、職場での体験を通して社会の在り方を垣間見ることにより勤労観・職業観をはぐむ職場体験活動
- ・ 自分と他者や社会との関係について考えを深める高等学校の時期においては、人に尽くしたり社会に役立つことのやりがいを感じることで、自分の将来展望や社会における自分の役割について考えを深めることが期待できる奉仕体験活動や就業体験活動をそれぞれ重点的に推進することが適当である。特に、職場体験活動や就業体験活動は、キャリア教育の視点からも重要な役割を果たすものである。

このため、現在においても、学習指導要領上、小・中・高等学校の特別活動において「旅行(遠足)・集団宿泊の行事」や「勤労生産・奉仕的行事」を行うことになっているが、今回の学習指導要領の改訂において、体験活動の重要性を一層明確にし、その内容に即して小・中・高等学校でそれぞれ重点的に行う体験活動について記述することが必要である。また、必要に応じ、各学校において体験活動を総合的な学習の時間に位置付けて充実を図ることができることを学習指導要領上明確にすることが求められている。

特に、これらの体験活動は、学期中や長期休業期間中に一定期間(例えば、1週間(5日間)程度)にわたって行うことにより、一層意義が深まるとともに、高い教育効果が期待されるものであり、学校や保護者等の負担を招かないよう、受け入れ先の確保、宿泊等に要する費用などについて、国や教育委員会等の支援・援助の充実を図る必要がある。また、教育委員会や学校において自然の家などの社会教育施設や関係団体、企業、自治会等との連携を日頃から図ることが必要である。

なお、これらの体験活動を総合的な学習の時間において行うに当たっては、体験活動を通して、どのような問題解決や探求的な活動を行うのか、目的やねらいを明確にし、総合的な学習の時間の趣旨等に沿ったものとする必要がある。その際、その効果として、学習指導要領上、特別活動(学校行事)として掲げられている旅行(遠足)・集団宿泊的行事や勤労生産・奉仕的活動などと同様の成果が期待できることが考えられる。その場合には、総合的な学習の時間における体験活動をもって相当する特別活動に替えることができるといった弾力的な取扱いが必要である。

「社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項」との関連

(環境教育)

地球温暖化、オゾン層の破壊、熱帯雨林の減少などの地球規模の環境問題や、都市化、生活様式に伴うゴミの増加、水質汚濁、大気汚染などの都市・生活型公害問題は世界各国共通の問題となっている。その解決に向けて、有限な地球の中で、環境負荷を最小限にとどめ、資源の循環を図りながら地球生態系を維持できるよう、一人一人が環境保全に主体的に取り組むようになること、そして、それを支える社会経済の仕組みを整えることにより、持続可能な社会を構築することが強く求められている。

エネルギー・環境問題は、人類の将来の生存とその繁栄にとってはもちろんのこと、資源の乏しい我が国にとって重要な問題である。21世紀に生きる子どもたちに環境や自然と人間とのかかわり、環境問題と社会経済システムの在り方や生活様式とのかかわりなどについて理解を深めさせ、環境の保全やよりよい環境の創造のために主体的に行動する実践的な態度や資質、能力を育成することが求められている。また、エネルギー・環境問題は、その意味で、科学的なもの見方や考え方をもちせなければならぬことを学ぶことは重要である。さらに、豊かな自然や身近な地域の中で様々な体験活動を通して、自然に対する関心等を培うことが必要である。

このような状況を踏まえ、これまでの、国際的にも、我が国においても、持続可能な社会の構築のために、教育の果たす役割の重要性が認識され、様々な取組が進められてきている。

今後は、原稿に引き続き、各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間それぞれの特質に応じ、環境に関する学習が行われるようにする必要がある。具体的には、例えば、社会科、地理歴史科、公民科において、環境、資源・エネルギー問題などの現代社会の諸問題についての学習の充実を図ること、理科において、野外活動で

の発見や気づきを学習に生かす自然観察や、「科学技術と人間」や「自然と人間」についての学習の充実を図ること、家庭科、技術・家庭科において、資源や環境に配慮したライフスタイルの確立、技術と社会・環境とのかかわりに関する内容の改善・充実を図ることなどを行う。さらに、幼児教育の段階から、発達の段階に応じて自然体験活動などの定見活動を引き続き進めていく必要がある。

(ものづくり)

我が国の経済は、ものづくり分野の強い競争力によって支えられていることは言うまでもない。しかし、近年、子どもたちが実際にものをつくるという経験が減少しているとの指摘がある。

ものづくりの重要性は、単に作り手としてのものをつくる技術を習得するという観点だけではない。むしろ緻密さへのこだわりや忍耐強さ、ものの美しさを大切に感性、持続可能な社会への構築へとつながる「もったいない」という我が国の伝統的な考え方のほか、ものづくりで大切なチームワークや自発的に工夫や改善に取り組む態度も重要である。これらは図画工作科や家庭科、技術・家庭科とともに、算数・数学での数量や図形に関する学習、理解におけるものづくりなどの科学的な体験や身近な自然を対象にした自然体験、体育科での球技や音楽科での合唱や社会科における文化財への理解などを通して培われるものである。また、地域での体験活動や読書活動などを通して伝統工芸などを支えてきた人々への生き方や考え方を知ることなども重視する必要がある。

(キャリア教育)

「生きる力」という考え方は、社会において子どもたちに必要となる力をまず明確にし、そこから教育の在り方を改善するという視点を重視している。近年の産業・経済の構造的な変化や雇用の多様化・流動化等を背景として、就職・進学を問わず子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変化している。このような変化の中で、将来子どもたちが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくためには、子どもたち一人一人の勤労観・職業観を育てるキャリア教育を充実する必要がある。

他方、非正規雇用者が増加するといった雇用環境の変化や「大学全入時代」が到来する中、子どもたちが将来に不安を感じたり、学校の学習に自分の将来との関係で意義が見出せずに、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった状況が見られる。さらに、勤労観・職業観の希薄化、フリーター志向の広まり、いわゆるニートと呼ばれる若者の存在が社会問題化している。

これらの点を踏まえ、現在においても、

- ・ 中・高等学校における進路学習の改善
- ・ 職場体験活動、就業体験活動等の職業や進路に関する体験活動の推進

などの取組を行っているところであるが、今後更に、子どもたちの発達の段階に応じて、学校の教育活動全体を通じた組織的・系統的なキャリア教育の充実に取組必要がある。

すなわち、生活や社会、職業や仕事との関連を重視して、特別活動や総合的な学習の時間をはじめとした各教科等の特質に応じた学習が行われる必要がある。特に、学ぶことや働くこと、生きることを実感させ将来について考えさせる体験活動は重要であり、それが子どもたちが自らの将来について夢やあこがれをもつことにつながる。具体的には、例えば、

- ・ 特別活動における望ましい勤労観・職業観の育成の重視
- ・ 総合的な学習の時間、社会科、特別活動における、小学校での職場見学、中学校での職場体験活動、高等学校での就業体験活動等を通じた体系的な指導の推進

などを図る必要がある。

役割分担の確認表

◆事前活動

教員	施設	全体指導者
<input type="checkbox"/> 実施場所のに関する情報収集	<input type="checkbox"/> 施設の提供(実施できる活動、宿泊先等)	<input type="checkbox"/> 受け入れ先に関する情報提供(実施できる活動、宿泊先等)
<input type="checkbox"/> ねらいの設定(教育課程上の目標、学級目標、児童の実態に即したねらい等)	<input type="checkbox"/> 学校のねらいに沿ったプログラム(案)の作成・提案	<input type="checkbox"/> 学校のねらいに沿ったプログラム(案)の作成・提案
<input type="checkbox"/> プログラムの決定・全体計画の作成	<input type="checkbox"/> プログラム・全体計画の作成への助言	<input type="checkbox"/> プログラム・全体計画の作成への助言
<input type="checkbox"/> 事前学習[集団宿泊活動に取り入れる教科学習の効果を高めるための事前学習、集団宿泊活動の準備に関わる事前学習[児童の係分担等]]	<input type="checkbox"/> 事前学習への協力(活動に関する情報提供・助言)	<input type="checkbox"/> 事前学習への協力(活動に関する情報提供・助言)
<input type="checkbox"/> 実地踏査	<input type="checkbox"/> 施設の活動場所の案内	<input type="checkbox"/> 実施場所の案内
<input type="checkbox"/> 危機管理体制の整備	<input type="checkbox"/> 危機管理体制の整備に対する助言	<input type="checkbox"/> 危機管理体制の整備に対する助言
<input type="checkbox"/> 保護者説明会の開催(ねらい、日程、教育的意義、家庭での協力事項、持ち物、準備等)		<input type="checkbox"/> 保護者説明会での補助
<input type="checkbox"/> 受け入れ先と連絡・調整(活動・宿泊の申込)	<input type="checkbox"/> 学校との連絡・調整(活動・宿泊の申込)	<input type="checkbox"/> 受け入れ先との連絡・調整(宿泊先担当者へのねらいの説明、協力事項の確認)
<input type="checkbox"/> しおり、名簿、教材等の作成		
<input type="checkbox"/> 運営会議(スタッフミーティング)の開催		<input type="checkbox"/> 指導者間での情報共有(ねらい・役割の確認・明確化、活動の提供方法の工夫等)

◆当日

教員	施設	全体指導者
<input type="checkbox"/> 児童の引率		
<input type="checkbox"/> 生活指導		
<input type="checkbox"/> 配慮の必要な子どもへの支援		
<input type="checkbox"/> プログラム全体の進行(担当部分)	<input type="checkbox"/> プログラムの進行状況の把握	<input type="checkbox"/> プログラムの進行状況の把握
<input type="checkbox"/> 活動の導入やまとめ(担当部分)	<input type="checkbox"/> 活動の導入(担当部分)	<input type="checkbox"/> 各活動の導入やまとめ(担当部分)
	<input type="checkbox"/> 活動の指導(担当部分)	<input type="checkbox"/> 学校の先生との進捗状況の確認
		<input type="checkbox"/> 活動の指導又は指導補助
		<input type="checkbox"/> 生活面の指導補助
<input type="checkbox"/> 教材、道具の準備(担当部分)	<input type="checkbox"/> 教材、道具の提供	<input type="checkbox"/> 教材、道具の準備(担当部分)
<input type="checkbox"/> 安全管理	<input type="checkbox"/> 安全管理	<input type="checkbox"/> 安全管理(主に活動場面)
<input type="checkbox"/> 評価に向けての観察や記録		
<input type="checkbox"/> 出納管理		

◆事後

<input type="checkbox"/> 事後指導	<input type="checkbox"/> 事後学習への協力	<input type="checkbox"/> 事後学習への協力
<input type="checkbox"/> 評価(児童の評価、活動の評価)		<input type="checkbox"/> 活動の評価への協力
		<input type="checkbox"/> 受け入れ先へのフォローアップ(情報提供・助言)

プログラム作成(聞き取りシート)

～スタッフから～

この「プログラム作成(聞き取りシート)」は、必ずしも作成しなくてはならないものではありません。ただ、教員の思いや研修のねらいが明確であれば、私たちスタッフもより良い支援ができます。子どもにとっても、教員にとっても素晴らしい体験ができるようにプログラム作成を一緒に考えたいと思っています。

団体名		プログラム責任者	
TEL		E-mail	
利用日(日程) / ~ /	入所時間 時 分	退所時間 時 分	
対象(学年・クラス数) 学年 クラス	人数(男女比) 男 人 女 人	生活班の人数と班数 人 班	
引率の人数 人	引率の指導経験 有・無	ボランティア・講師の有無 ボ ラ ン テ ィ ア 要・不要 講 師 要・不要	
予算(教材費) 円	予算(指導謝金は可能か) 可・不可		
指導者の思い(身に付けさせたい力・伸ばしたい力)			
重視したいポイント			
取り入れたい活動			
子どもの現状(良い面)	子どもの現状(課題)	(その背景は?)	
評価について			

* 活動計画を提出される前に、プログラムの企画立案で悩まれている担任の先生を支援します。希望される方は国立吉備青少年自然の家企画指導専門職までお問い合わせください。(tel:0866-56-7232/fax:0866-56-7233)

プログラム企画時のチェックリスト

ねらい	<input type="checkbox"/> ねらいや意義が明確なプログラムになっていますか？
	<input type="checkbox"/> 全体の流れ(ストーリー)ができていますか？
	<input type="checkbox"/> 子どもが自分で考えて自由に使える時間は確保されていますか？
	<input type="checkbox"/> 子どもが活動全体をふりかえる時間はありますか？
学校教育への適合	<input type="checkbox"/> 活動プログラムと教科学習等との関連に配慮できていますか？
	<input type="checkbox"/> 子どもの心身の発達段階をふまえていますか？
	<input type="checkbox"/> 学校や学級の状況や人間関係(教員と子ども、子ども同士)に配慮していますか？
	<input type="checkbox"/> 指導者の役割分担や教職員の勤務体制について考慮していますか？
	<input type="checkbox"/> スタッフ間、スタッフと教員との間で目的の共有はできていますか？
活動内容と安全	<input type="checkbox"/> フィールドについての情報は十分ですか？
	<input type="checkbox"/> 装備品等の確保はできていますか？
	<input type="checkbox"/> 具体的な危険とそれを回避する方法を考慮していますか？
	<input type="checkbox"/> 緊急時の対応について配慮していますか？
	<input type="checkbox"/> 活動に必要な経費は確保されていますか？
	<input type="checkbox"/> 荒天時の代替プログラムや必要な場所は確保されていますか？
説明責任	<input type="checkbox"/> 保護者にねらいや意義を理解してもらえるプログラムになっていますか？
	<input type="checkbox"/> 保護者の理解を得られる費用設定になっていますか？
	<input type="checkbox"/> 保護者の理解を得られる日程となっていますか？

プログラム実施時のチェックリスト

ねらいを伝える	<input type="checkbox"/> 伝えたい思いは、分かりやすく短い言葉になっていますか？
	<input type="checkbox"/> なぜその思いを伝えたいのか、理由を分かりやすく説明することができますか？
	<input type="checkbox"/> そのプログラムが終わった後、参加者に言わせたい「一言」は明確ですか？
子どもの現状理解	<input type="checkbox"/> 参加する子どもは、普段は何を考え、どんな生活をしていますか？
	<input type="checkbox"/> 参加する子どもは、あなたとどんな時間を過ごしたいのでしょうか？
伝える手法 (プログラム)	<input type="checkbox"/> 思いを伝える手法(プログラム)は、ベストな方法ですか？
	<input type="checkbox"/> 今自分たちが持っている技術や能力で提供できる内容になっていますか？
安全管理	<input type="checkbox"/> 実地踏査(下見)は十分ですか？
	<input type="checkbox"/> その方法で、安全に提供できることを説明できますか？
	<input type="checkbox"/> 事故やケガを未然に防ぐ手だてをしましたか？
	<input type="checkbox"/> 事故やケガが起きてしまった時の手立てを確立していますか？
	<input type="checkbox"/> それらの危険をスタッフ間で共有できていますか？
道具について	<input type="checkbox"/> 目的を達成するために必要十分な数が揃っていますか？
	<input type="checkbox"/> 使う道具は、安全なものですか？
	<input type="checkbox"/> 子どもが使ったときの想定ができていますか？
	<input type="checkbox"/> 十分に整備され、丁寧に使ってもらえる状態になっていますか？
	<input type="checkbox"/> 目的を達成するために必要十分な数が揃っていますか？
アクティビティ デザイン	<input type="checkbox"/> 子どもの前に立つときの、スタッフの役割分担は明確ですか？
	<input type="checkbox"/> スタッフ全員が、ねらいやプログラムを理解していますか？
	<input type="checkbox"/> 様々な活動が、目的に向かう「ストーリー」として無理なく組み立てられていますか(活動の組み立て方は論理的)？
	<input type="checkbox"/> はじめる前に頭の中でグループの最初、中ごろ、そして終盤の様子をイメージすることができますか？
	<input type="checkbox"/> 様々な活動をつなげるストーリーを伝えるための、「問いかけ」は用意してありますか？
	<input type="checkbox"/> あらかじめ用意していた活動がグループの状況と目標に合わないときの代替案はありますか？
パフォーマンス	<input type="checkbox"/> 子どもや先生の前に立つときの服装は、指導者として適切ですか？
	<input type="checkbox"/> 子どもたちを前向きにさせる表情、立ちふる舞いをしていますか？
	<input type="checkbox"/> すべての子どもの心に響くような言葉を発することができますか？
	<input type="checkbox"/> 子どもを十分に理解し、配慮して言葉を選んでいきますか？
	<input type="checkbox"/> 人前でしゃべっている自分に酔ってはいませんか？
その他	<input type="checkbox"/> 「はじめます」「終わります」がはっきりしていますか？
	<input type="checkbox"/> 人権を侵害するような差別的・侮蔑的な言動は取っていませんか？
	<input type="checkbox"/> 開催前に、参加者に十分な情報が行きとどいていますか？(集合・解散の場所と方法、服装、持ち物、どういう活動がなされるのか、など)
	<input type="checkbox"/> 保護者の信頼を得るよう努力していますか？(命を預ける対象として信頼されているか/信頼できるプログラムか)
	<input type="checkbox"/> 適切な広報、啓発活動がされていましたか？
	<input type="checkbox"/> 保護者向けの案内は、見やすく、的確な表現で、必要な情報が書かれていますか？

学校の集団宿泊体験活動 ～「事後評価チェックリスト」～

教育課程	<input type="checkbox"/> 学習指導要領に配慮した内容になっていたか？
	<input type="checkbox"/> 学校の教育目標を達成するプログラムであったか？
	<input type="checkbox"/> 学年の教育目標、年間指導計画に合致したプログラムであったか？
	<input type="checkbox"/> 年間指導計画の策定段階から本プログラムを組み入れることができたか？
	<input type="checkbox"/> 設定した目的(ねらい)を達成するプログラムであったか？
学校の運営	<input type="checkbox"/> 子どもの学びや育ちを客観的に把握する場や機会を設定することができたか？
	<input type="checkbox"/> 教員同士の役割分担は明確であったか(事前・活動中・事後)？
	<input type="checkbox"/> (長期)集団宿泊活動の実施について、教職員の同意と協力を得ることができたか？
	<input type="checkbox"/> 引率教員の配置に伴い、多学年の教育活動に支障はなかったか？
	<input type="checkbox"/> 事故発生時の対応体制は構築できていたか、または、それは機能したか？
	<input type="checkbox"/> プログラム終了後、評価の結果を、学校・学年・学級経営に反映することができたか？
	<input type="checkbox"/> 次年度以降も継続できる仕組みを構築することができたか？
保護者	<input type="checkbox"/> (長期)集団宿泊活動の実施に際し、保護者の理解を得ることができたか？
	<input type="checkbox"/> 保護者の負担軽減策(参加費、準備物)は有効だったか？
	<input type="checkbox"/> 活動中、活動後の子どもの様子や変化を効果的に伝えることができたか？
	<input type="checkbox"/> 引率団をバックアップしてくれるような協力関係を構築することができたか？
子どもの実態	<input type="checkbox"/> 児童に関する必要十分な事前情報を収集することができたか？
	<input type="checkbox"/> 子どもの学びや育ちを促す明確なねらいを設定することができたか(ねらいは妥当だったか)？
	<input type="checkbox"/> 子どもの関心意欲を引き出し、求めていたレベルまで引き上げることができるプログラム内容であったか？
	<input type="checkbox"/> 活動中、不十分な安全対策が原因となった、病気やケガ、事故等はなかったか？
	<input type="checkbox"/> 配慮の必要な子どもに対する適切な支援体制を取ることができたか？
	<input type="checkbox"/> 子ども一人ひとりの気づきや学びを客観的に把握することができたか？



参考資料

- ・ 「学校で自然体験をすすめるためにー自然体験活動指導者養成講習会テキスト」
国立青少年教育振興機構
- ・ 「体験活動事例集ー体験のススメ [平成 17、18 年度 豊かな体験活動推進事業より]」
文部科学省 平成 20 年 1 月
- ・ 「グループのちからを生かす」 プロジェクトアドベンチャー・ジャパン
- ・ 「活動プログラム集」 国立夜須高原少年自然の家
- ・ 「プログラム作成の手引き 新しい自然体験活動のすすめ」 国立諫早青少年自然の家

独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立吉備青少年自然の家

〒716-1241

岡山県加賀郡吉備中央町吉川4393-82

TEL 0866-56-7232

FAX 0866-56-7235



ホームページ <http://kibi.niye.go.jp/>

吉備青少年 検索